

一人二役

江戸川乱歩

青空文庫

人間、退屈すると、何を始めるか知れたものではないね。

僕の知人にTという男があつた。型の如く無職の遊民だ。大して金がある訳ではないが、まず食うには困らない。ピアノと、蓄音器と、ダンスと、芝居と、活動写真と、そして遊里の巷、その辺をグルグル廻つて暮している様な男だつた。

ところで、不幸なことに、この男、細君があつた。そうした種類の人間に、宿の妻という奴は、いや笑いごとじゃない。正に不幸といつすべきだよ。いや、まったく。

別に嫌っていたという程ではないが、といつて、無論女房丈けで満足しているTではない。あちらこちら、箸まめにあさり歩く。

いうまでもなく、女房は焼くね。それが又、Tには一寸捨てるまで、おつな楽しみでもあつたのだ。一体Tの女房というのが、なかなかどうして、Tなんかに、勿体ない様な美人でね。その女房に満足しない程のTだから、その辺にざらにある売女などに、これはという相手の見つからう筈もないのだが、そこがそれ、退屈だ。精力の過剰に困っているのでもなければ、恋を求める訳でもない。ただ退屈だ。次々と違った女に接して行けば、そこにいくら変つた味がある。又、どうした拍子で、非常な掘出し物がないでもあるまい。Tの遊びは、大体そんな様な意味合のものだった。

さて、そのTがね、変なことを始めた話だよ。それが実に奇想

天外なんだ。遊戯もここまで来ると、一寸凄くなるね。

誰しも感じることだろうが、自分の女房がね、自分以外の男に、つまり間男にだね、接する時の様子をすき見したら、さぞ変な味がするだろう、……いや、実際にやられては耐^{たま}らないが、ただふっとそんな好奇心の起ることがある。Tのあの奇行の動機も、恐らく大部分はそうした好奇心だったに相違ない。T自身では、彼の放蕩^{ほうとうざんまい}三昧^{まい}に対する細君の嫉妬^{しつと}を封^{ふう}ずる手段だと称^{しょう}していたがね。

で、彼は何をしたかというと、ある夜のこと、頭から足の先まで、すっかり外で調えた新しい服装で、鼻の下へはチョップリ^{つけひげ}附^つまでして、つまり手軽な変装をしたんだね。そして、自分の

でない、出鱈目でたらめのイニシアルを彫らせた銀のシガレット・ケースを袂たもとにしのばせて、何気ない風で自宅へ帰つたものだ。

細君は、Tがいつもの通り、どつかで夜更よふかしをして帰宅したのだと信じ切っている。いや、それは当然のことだが、つまりTの変装に少しも気がつかなかった。夜更けに寝惚ねとぼけ眼まなこで見たのだからそれも無理ではない。Tの方でも十分用心をして、新しい着物の縞しま柄がらなども、以前からあるのとまぎらわしい様なものを選んでいたし、附髭とこは床とこに這入はいるまで、掌てのひらや、ハンカチなどで隠す様にした。で、結局、Tのこの奇妙な計画はまんまと首尾よく成功したんだ。

床の中でね、彼等は電燈を消して寝る習慣だったから、真暗な

床の中でだね、Tはやつと髭を押えていた手を離した。で、つまり、当然だね、その異様な毛髪の感触が、細君を驚かせた。

「アラ、……………」

細君が、可愛らしい悲鳴を上げたのは、こりや決して無理はない。同時にTとしては、ここが最も難しい所だ。彼は細君が髭の存在を認めたことが分ると、早速向きを転かえて、二度と髭に触らせない様に、蒲団を被つて、グウグウ空そらいびき 軒をかき出したものだ。

ここで、細君が怪しんで、あくまで穿せん鑿さくをしようものなら、Tの計画は、すっかりオジャンだ。空軒をかきながら、彼はもうビクビクものだったというね。ところが、細君、案外暢のんき気なもの

で、何か感違しいしたとでも思ったのか、そのままじつとしている。暫しばらく待つていると、スウスウと優しい躰たが聞えて来た。もうしめたものだ。

そこで、Tは、細君が十分寝込んだ折を見すまして、ソツと床の中から這い出した、手早く着物を着ると、例の銀のシガレット・ケース丈を枕まくら許もとへ残して、音のしない様に、家から抜け出し、それも、まともな入口からでなくて、庭の堀へいをのり越したのだ。もうその時分車なんかありやしない、テクテクと、十何町の道を、行きつけの待合まちあへ歩いた。酔すい狂きやうな男もあつたものだ。さて、翌朝だ。細君、目を醒さめて見ると、一緒に寝ていた筈の夫が、も抜けのからだだから、少なからず驚いた。家中探して見た

が、どこにもいない。寝坊の夫が、この早朝外出する筈もなし、妙だなと思ひながら、ふつと気がついたのは、枕許のシガレット・ケースだ。一向見慣れぬ品だ。夫が始終持つてゐるのとは違ふ。で、手にとって調べて見ると、まるで心当りのないイニシアルが刻んである。中の巻煙草まで、夫の常用のものとは違つてゐる。夫がどこかで取違えて来たのかとも考へて見たが、さて、何とやら腑ふに落ちぬ。と、思出すのは、昨夜ゆうべの髭の一件だ。さあ、細君どれ程か心配したことであらう。

そこへ、Tが、昨夜家を明けたのがきまりが悪いという様な、殊勝しゆしょうげ気な顔つきで帰つて来た。無論服装は、前日家を出た時のとおりに換へてゐるし、つけ髭もとつてある。いつもなら、細君、

ただは置かないのだけれど、今日はそれどころではない。彼女の方に、途方もない心配があるのだ。妙な工合ぐあいで、だんまりで、Tは茶の間へ通る、細君は青い顔をしてあとからついて来る、といった鹽梅あんばいだ。

しばら暫くすると、細君がおずおずしながら聞くんだね。

「この煙草入れ、どつかで取りかえていらつしたのじゃなくつて」

いうまでもなく、例の銀製のシガレット・ケース。

「いいえ、それ、どうかしたのかい」

と、Tがとぼけて見せると、

「だって」と少しあまえて、「ゆうべ、あなたがもってお帰りな

すったのじやありませんか」

「へええ」と更にとぼけて「だが、僕のはちやんと、これ、ここに持っているよ。それに、第一僕がゆうべ帰ったって？」ここで少し調子を高める。この一言で、細君をハツとさせる訳だわけね。

などと、落語家みたいに、会話入りでやつちや、際限がないから、それはよすとして、よろしく一問一答を繰りかえしたのち、とど、細君が昨夜の一いち伍ぶ一し什じゅうを、打開ひらけて了しまうところまでこぎつけた。

そこで、Tはさも不思議そと相あな顔かほをして見せ、そんな馬鹿なことのあろう道理がない。自分はゆうべ××や家で、何の誰と一晚呑みあかしたのだから、何ならあの男に聞いて見るがいい、と、これ

がつまり、探偵小説の言葉で云えばアリバイだね。それは前も以つてちゃんと頼み込んであるのだ。エ、お前がそのアリバイを勤めたのかつて、イヤ、違う違う。

「お前夢でも見たのではないか。いいえ、決して夢ではありません。夢でなかった証拠には、ちゃんと煙草入れが残っているのだ。はてな、昔の書物に、離魂病りこんびょうというものが見えているが、まさ

か今の時節、そんなこともあるまい。その離魂病というのはね、

一人の人間の姿が、二つに分れて、同時に、違った場所で、違つた行おこないをするというのだ。などと、一寸怪談めいて見たり、お前そんなことを云つて、実はソツとどこかの男を引入れているのではないか」などおどと脅しつけて見たり、それが又、Tには、何とも愉

快でたまらないというのだから、因果さ。

が、兎とも角かくも、その日は有耶無耶うやむやで済んで了った。無論、一度位では駄目だ。Tの計画では、幾度も、幾度もそれを続けてやって見る積りつもだった。

二回目は、少々心配した。細君、前に懲こりているから、うっかり変装して行こうものなら騒ぎ出しやしないかというのだ。で、今度は、家に這入る時には、変装もせず、髭もつけずに行つて、さて、電燈も消して、床につき、細君がもう寝入るといふ頃を見み計はからつて、夢ゆめ現うつの間に、ほんの瞬間、例の髭の感触を与え、そして、寝入つて了ったのを見すまして、やつぱり前通りのイニシャルを縫いつけたハンカチを残して、家を抜け出す手筈にした

が、なんと、それが再びうまく成功したではないか。翌朝の模様は、前の時と似たり寄つたりで、ただ、細君の顔が、一層青ざめ、Tの狂言嫉妬しつとが、更に手強くなつた位の相違だつた。

そうして、三度となり、四度と重なつて行くに従つて、Tのお芝居は益々上達し、今では、細君にとつては、煙草入れや、ハンカチのイニシアルの男が、はつきりした、実在の人物になつて来たが、それと同時に、ここに妙な事が起つて来たのだ。これまでわらいばなしの所はね、まあ謂いわば笑話わらいばなしにすぎないけれど、これから先は、話が少し固くなつて来るのだよ。人間の心が、如何いかにたよりない、そして又不思議なものだといった風の、一寸考えさせられるものを含んでいるのだよ。

第一に起つた変化は、細君の側がわにあつた。その貞女を以て聞えた細君がね、女なんて實際分らないものだ、変装した方のTに対して、明かにTの外ほかの男だと信じつつ、ある好意を見せ始めたのだ。この辺の心理は可也かなり不思議なものだが、併し、昔の物の本などによく例がある、つまり、それは、何なんびと人とも分らぬ男との、夜毎よごとの逢瀬おうせは、恐らく、彼女にとって、一つのお伽ときばなし噺ばなしであつたのであろうか。

一方に於おいて、彼女は、変装のTがその都度つど残して行く、証拠品を、夫であるTに隠す様になつた。そればかりか、他の一方に於ては、変装のTに対して、夫とは別人であると意識した上の、罪ささやの囁ささやきを囁く様になつた。「あなたが、どこの何というお方だか、

その見知らぬあなたが、どうして妾わたしの所へ通つて下さるのか、妾には少しも分らない。でも、あなたの御深切しんせつが、今ではもう、妾には忘れ難いものになつて了つた。あなたのお出いでなさらぬ夜が淋しく感ぜられさえする。この次は、いつ来て下さるのでしようか」そうした細君の変心（というには少し変だけど）を知つた時の、Tの心持は、實際何とも形容の出来ぬ変てこなものであつたに相違ない。

一方から見れば、これは、Tの最初の目論見もくろみが完全に果された訳であつた。こうして、細君の方に大きな弱味が出来て了えば、彼の放蕩は五分五分だ。決して細君に対して引け目を感じる必要はない。だから、彼の計画から云えば、この辺で、この妙な遊戯

を打切つて、変装した彼自身を、永久にこの世から葬つて了えばよいのだ、そうすれば、元々実在しない人物のことだから、あとに煩わづらいの残る筈はない、とTは考えていた。

ところが、今彼の心は、最初は全然予想しなかつた、極度の混乱に陥つて了つたのだ。假令たとえ、假想の人物にもせよ、細君が彼以外の男を愛し始めたという、この恐しい事実が彼を撃つた。始めは狂言であつた嫉妬が、真剣なものに變つて来た。若もしこういう心持が嫉妬といえるならばだ。そこには相手がないのだ。一体全体、誰に向つて嫉妬をするのだ。細君は決してT以外の男に肌身を許した訳ではない。つまり、彼の恋敵こいがたきは、とりも直さず彼自身に外ならぬのだ。

さあ、そうになると、以前はさ程でもなかつた細君が、この世に二人とないものに思われて来る。その細君を、他人にまさ（正しく云えば自分自身にだが）奪われたかと思うと、くやしきは一通りではない。細君がぼんやり物思いに耽ふけっている。アア、彼女は今、もう一人の男のことを思っているのだな。そう考えると、もうたまらない。Tは実に取返しのつかぬことをやってしまったのだ。彼は自分自身の仕掛けた罠わなにかかったのだ。

慌あわてて、仮装を中止して見たところで、今更ら何の甲斐かいもなかつた。夫婦の間には、いつの間にか妙な隔意を生じていた。細君はともすれば憂鬱ゆううつになった。恐らく彼女は姿を見せぬ男のことを、諦め兼ねているのに相違ない。Tはそれを見るのがつらかつ

た。と同時に、それ程心にかけている男というのが、実はもう一人の自分であることを考えると、それは満更嬉しくないこともなかった。

一層一伍一什を打開けて了おうか、だがそうすることは、何となくいやだった。一つは余りに馬鹿馬鹿しい自分の行為が恥しくもあつたし、それに、もう一つは、実はこれが最大の原因なのだが、生れて始めて経験した、忍ぶ恋路の身も世もあらぬ楽しさを、Tはどうにも忘れ兼ねた。彼は、そこに、本当の恋を見出した様に思った。本来のTに対しては、世間並の女房に過ぎなかつた彼女が、その心の奥底にあの様な情熱を隠していようとは。Tは全く意外であつた。そして逢瀬が重なれば重なる程、そのことは明

かになつて行つた。今更ら、あれは狂言だつたなどとどうして云えるものか。

併し、この二重生活をいつまでも続けることは、煩わしいばかりでなく、細君に真相を悟られる虞おそれがあつた。これまでは、いつも夜更けを選んで、暗い電燈の下や、多くはその電燈さえもない闇の中で逢つていたのだし、一方明白なアリバイが用意してあつたから、まず安全であつたけれど、そんな異常な会合がそうそう続けられるものではない。とするとそこには三つの方法しかない。第一は仮想の人物を葬つて了うこと、第二はトリツクの一伍一什を打明けること、そして第三は、実に変なことだけれど、彼が、細君に愛想をつかされた、いわばこの世に用のないTという人物

を辞職して、その代りに一方の仮想の男になり切つて了うこと。

今も云う通り、仮想の人物としての、細君との、謂わば初恋を発見した彼は、どうにも、第一第二の道を選ぶ気にはなれなかつた。そこで非常に難しいことだとは思つたが、遂に、第三の方法を採^とることに決心した。つまり、Aという男が、A Bの二役を勤め、それから今度は、始めのAをすてて、まるで違つたBの方^{こしら}にばけて了うのだ。嘗^{かつ}てこの世に存在しなかつた一人の人間を拵^{こしら}えるのだ。

そう決心すると、Tはまず旅行と称して、一ヶ月ばかり家をあけ、その間に、出来るだけ顔形を変えようとした。頭髪の刈り方を違え、口髭を生^{はや}し、眼鏡^{めがね}をかけ、医者^{ひとえま}の手術を受けて、一重眼

瞼ぶたを二重にし、その上顔面の一部に、小さい傷さえ拵えた。そして、髭が伸びた頃に、態わざわざ々九州の方まで出掛けて行って、そこから、細君の所へ一通の絶縁状を送ったものだ。

細君は途方に暮れた。相談を持込む親戚とてもないのだ。幸い、夫が多額の金を残して行ったので、その方の不自由は感じなかったが、そうかといつて、じつとして居る訳には行かぬ。こんな時、あの方が来て下すつたら、きっと彼女はそう思ったに相違ない。丁度そこへ、仮想の男になり済すましたTが、ヒョッコリとやって来た、最初は、細君、その男をTだといつて聞かなんだが、Tの友人が訪ねて来ても、まるで話が合わなかったり、（それはTが予あらかじめ頼んだこの芝居の脇役なのだ）仮装の男の身許が明かになった

りしたので（これもTが拵えて置いたのだ）つい、彼等が全く別人であることを信ずる様になった。これが、何かそうする理由でもあつたのなら、いくら何でもだまされはしないのだろうが、T自身の心持を外ほかにしては、まるで理由というものがないのだ。まさか、こんな馬鹿馬鹿しいお芝居が演じられようとは、誰にしたつて、思いも寄らないからね。Tの細君は案外易やすやす々とだまされたのも、これは無理もないよ。

間もなく、彼等は住所を換えて同棲することになった。無論名前もTではなくなつた。お蔭で、僕等Tの友人は、かたくお出入りをさし止められたものだ。聞くところによると、其後Tはそのごふつつきり遊ばなくなつた相だ。そして、この喜劇にも等しいお芝居が、

案外好結果を納めて、彼等の仲は、引続き非常に睦まじく行つて
いるという噂だ。世の中に変つた男もあるものだね。

ところで、お話はまだ少しあるんだよ。それは、つい最近のこ
とだが、ある所で、僕はふと、昔Tであつた男に出逢つた。見る
と彼は例の細君を同伴している。で、僕は、言葉をかけては悪い
のだろうと思ひ、何気ない風を装つて、彼等の前を通り過ぎよう
とすると、意外にもTの方から僕の名前を呼びかけた。そして、

「いや、その御配慮には及びませんよ」

昔から見ると、ずっと快活な声でTが云つた。僕達はそこにあ
つた椅子いすに腰かけて、久しぶりで語り合つた。

「ナニネ、もうすっかり手品の種が分つているのですよ。これを

うまく担^{かつ}いだ積りでした私の方が、実はすつかり、あべこべに担がれていたのです。これは、あの私のいたずらを、最初から気附いていたんだ相^{そう}です。でも、別段害のある事柄ではなし、それで家庭が円満に行く様にでもなれば、これに越したことはないと思、つい、だまされた様な体^{てい}を装っていたのだといいます。道理でうまく運び過ぎると思いましたがよ。ハハ……、女なんて魔物です
すね」

それを聞くと、傍^{そば}に立っていた、相変らず美しいTの細君は、恥しそうにほほえんだ。

僕も、最初から、そんなことではあるまいかと、いくらか疑^{うたがい}を抱いていたので、さして驚きはしなかったが、Tには、それが自

慢であるらしく、幾度も同じことを繰返して、自分で驚いて見せていた。この調子なら、先生やっぱり仲睦むつまじくやっているな。そこで、僕は窃ひそかに、御兩人を祝福したことであった。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第一巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、
光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第六巻」平凡社

1931（昭和6）年11月

初出：「新小説」春陽堂

1925（大正14）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86) を、大振りにつくっています。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：A.K

2016年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

一人二役

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>